

- ◆2023年5月10日発行ラインナップ◆
- ・「卵」に異変が！
 - ・飼料用米多収穫のレジェンドを訪ねて

「卵」に異変が！

飼料価格高騰、エネルギー価格高騰そして鳥インフルエンザ

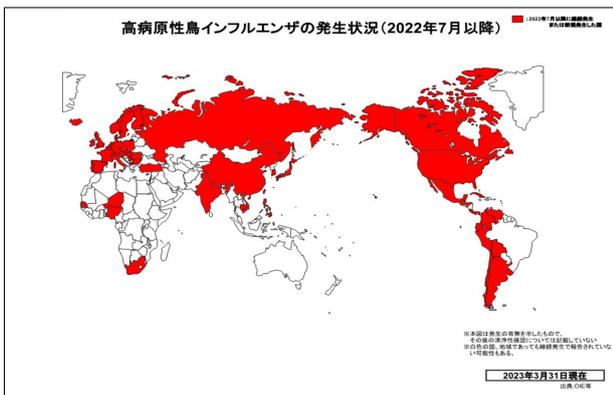
物価の優等生であった「卵」に異変が起きている。卵の卸価格の目安となる「JA全農たまご」の東京地区Mサイズの基準価格は1キロ当たり343円と去年の同じ時期195円に比べ76%の値上がりとなっている。その原因としては①ウクライナ情勢や中国の旺盛な需要により鳥のエサとなるトウモロコシなどの飼料価格が値上げ基調になったこと②エネルギー価格の上昇③高病原性鳥インフルエンザの世界的な流行があげられる(図1参照)。

国内では今シーズン1,500万羽超のニワトリが処分されており、うち卵を採るためのニワトリは国内で飼育する約1割が処分の対象となっている。これらの要因により卵の出荷数が減少し卵価格が高騰している訳だ。都内では一人1パックに制限し販売しているスーパーマーケットも見かける。ではいつまで続くのか？ヒナから育てても飼育数が戻るには最低でも半年以上かかると言われている。さらに飼料価格高騰などで経営ができない採卵場も増えてくると不安定な状況が続く、当面卵の価格が下がる要素が見当たらないのが現状だ。

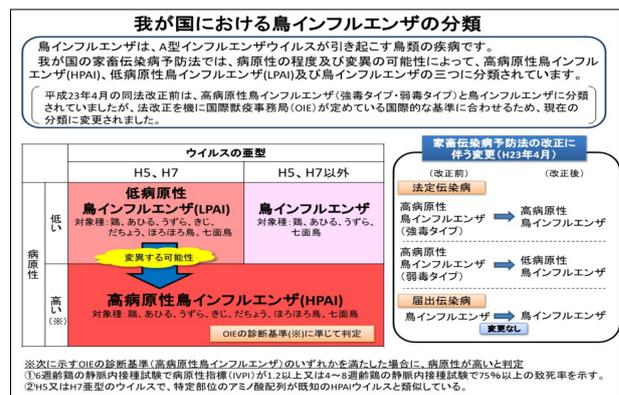
卵は物価の優等生だけでなく広く多くの場面で利用されており、食品業界では「起泡性」「熱凝固性」「乳化性」という3つの働きを利用している。「起泡性」を利用したものがスポンジケーキやメレンゲ、「熱凝固性」はプリンやハム、かまぼこ等の練り製品に利用されている。「乳化性」はマヨネーズやアイスクリームなどのなめらかな食感やコクを生むのに卵を利用している。また卵殻はベビーフードや麺などの食品、チョーク、スタッドレスタイヤなど意外なものに活用されている。

肥料業界においても改良材として活躍しており、鶏糞は肥料として元肥や追肥などに広く利用されているが、卵不足同様に全国各地で鶏糞不足も散見されるようになった(採卵鶏の鶏糞 約800万トン、ブロイラーの鶏糞 約500万トン 出典：農林水産省 畜産環境をめぐる情勢 平成30年)。卵同様に「鶏糞」は物価の優等生であり、また近年は「みどりの食料システム戦略」においてスポットライトを浴びているが、入手困難という事態に陥っており、その供給が従来のレベルに回復するまで長期化にならないことを願いたい。

こんな事態を引き起こした「高病原性鳥インフルエンザ」について説明したい。鳥類がA型インフルエンザウィルスに感染して起こる病気を「鳥インフルエンザ」と称している(図2参照)。「高病原性鳥インフルエンザウィルス」とは鶏に対する病原性を指標にしており、人に対する病原性とは全く関係はなく我が国で鶏肉や鶏卵を食し、人が「鳥インフルエンザ」感染する可能性はないようだ(食品安全委員会)。しかし海外で野鳥に触れたり、鶏肉や鶏卵を食べることで感染することがあるようなので注意が必要だ(首相官邸HPより)。



(図1)



(図2)

(次ページへ続く)

「コロナウィルス」「インフルエンザウィルス」により人間が振り回されている現代社会だが、早く特效薬が開発され我々の様々な不安が解消されることを願いたい。

～飼料用米多収穫のレジェンドを訪ねて～

平成28年度より毎年開催されている「飼料用米多収日本一」。飼料用米生産農家の生産に係る技術水準の向上を推進するためコンテストは実施され広く啓蒙されている。表彰される区分は2つあり、単位収量の部、地域の平均反収からの増収の部が設けられており全都道府県の飼料用米生産者が対象となっている。過去に当紙496号(2017年3月29日発刊)において飼料用米多収日本一コンテスト元年であった平成28年度産飼料用米にて当社関係資材をご利用いただいた受賞者を紹介させて頂いた事もあるが、過去6回のコンテストが行われている中で先の2部門にて複数回受賞されている猛者はわずか4法人(個人含む)しかない。その中のおひとりです当社資材取引先より肥料をご利用頂き受賞された、青森県五所川原市の株式会社高橋米穀の高橋ご夫妻を訪ねた。

令和3年度の単位収量の部にて農産局長賞を、令和年度も単位収量の部にて協同組合日本飼料工業会会長賞を連続受賞されているレジェンドだ。同年はコロナ禍であったため通常東京で行われていた表彰式は挙行されず地元での表彰式となったのは残念なところだ。同社の取組概要は30%の高窒素成分の基肥一発肥料を利用、反当窒素成分を12kg施肥し追肥はNK肥料をピンポイントで施肥ムラなく無人ヘリで散布し省力で行っているのが特徴。地域の勉強会や意見交換で得た栽培技術を積極的に取り入れ実績に結びつけている。

また、飼料用米の銘柄選定も重要だ。ご当地は本州最北の青森県であるため耐寒性に強く多収性品種の「みなゆたか」や「ゆたかまる」を採用してるのも特徴となっている。生産物はフレコン出荷にて八戸の飼料工場に直送り包装容器代や運搬費用の軽減を図っている。

青森県には八戸に飼料メーカーがあるため飼料用米を生産するのも輸送コスト面で有利となっており、生産者が飼料用米を取組やすい環境が整っているのも利点のひとつだ。青森県は主食用米の収量が高い。中でも津軽平野にある五所川原市の平均反収は令和3年度で682kg、令和4年度では674kgとなっており、県内有数のハイレベル反収を誇る地域だ。その中で高橋様は地域反収の差は+170kg、+154kg/10aを取られており、作付面積も決して小面積ではなく10.4ha、7.9haの規模であり、誰もが認める篤農家だ。

高橋俊恵社長は朴訥でもひとつひとつの言葉に重みがあり背中語るタイプ。奥様の美代子さんは常に朗らかで社長を陰日向と支えるご覧の通りの津軽美人。そんなご夫妻のご子息である裕典専務はしっかり者と

評判で誰もがうらやむ家族だ。粗飼料であるトウモロコシをはじめ国際市況は高水準で推移しており国産の飼料用米は時の相場に揉まれながらも存在感を増している状況だ。そんな中での飼料用米多収日本一コンテストは生産意欲を高め技術研鑽を広く周知させる意義のある活動となっている。

高橋米穀様のますますの発展を祈念申し上げます。(新規事業開発室)



飼料用米多収日本一 複数回受賞者 高橋様ご夫妻

5/5の石川県能登地方を震源とする地震で被災されました方々に心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復旧をお祈り申し上げます。